

夏目漱石

私の経過した学生時代

私の経過した学生時代

一

私の学生時代を回顧してみると、ほとんど勉強という勉強はせずに過したほうである。したがってこれに関して読者諸君を益するような斬新ざんしんな勉強法もなければ、面白い材料おもしろも持たぬが、自身の教訓のため、つまり這麼こんな不勉強者は、こういう結果になるという戒いましめを、思い出したまゝ述べてみよう。

私は東京で生れ、東京で育てられた、いわば純粹の江戸ツ子である。はつきり記憶しておらぬが、なんでも十一二のころ小学校の門（八級制度の頃）を卒おえて、それから今の東京府立第二中学——そのころ一ツ橋にあつた——に入はいつたのであるが、いつも遊ぶほうが主になつて、勉強という勉強はしなかつた。もつともこの学校に通つていたのはわずか二三年に止とゞまり、感ずるところがあつてみずから退ひいてしまつたが、それには曰いわくがある。

この中学というのは、今の完備した中学などとは全然異つていて、その制度も正則と、変則との二つに分れて

いたのである。

正則というのは日本語ばかりで、普通学の総てすべを教授されたものであるが、その代り英語はさらにやらなかった。変則のほうはこれと異って、たゞ英語のみを教えるというに止とどまっていた。それで、私はどれにいたかといえ、この正則のほうであったから、英語はすこしも習わなかったのである。英語を修めていぬから、当時の予備門に入るはいことが六むか敷しい。これではつまらぬ、今まで自分の抱いだいていた、志望が達せられぬことになるから、ぜひよそうという考かんがえを起したのであるが、なかなか親

が承知してくれぬ。そこで、よんどころ 抛ななく毎日毎日弁当を吊つるして家はあるが、学校には往ゆかずに、そのまゝ途中で道草を食って遊んでいた。そのうちに、親にも私が学校を退きたいという考かんがえが解わかったのだらう、間もなく正則のほうは退くことになったというわけである。

二

すでに中学がまえいうごとく、正則、変則の二科に分れており、正則のほうを修めた者にはさらに語学の力が

ないから、予備門の試験に応じられない。これ等の者は、それがため、たいていはある私塾しじゆくなどへ入はいつて入学試験の準備をしていたものである。

そのころ、私の知っている塾じゆくしや舎には、共立きやうりつ学舎、成立せいりつ学舎などというのがあつた。これ等の塾じゆくしや舎はずいぶん汚きたないものであつたが、授さずくるところの数学、歴史、地理などいうものは、皆原書を用いていたくらいであるから、なか／＼素養のない者には、非常に骨ほねが折おれたものである。私は正則のほうを廃よしてから、しばらく、約一年ばかりも麴こうじまち町の二松学舎にしやうに通つて、漢学ばかり専門

に習っていたが、英語の必要——英語を修めなければ
静止じつとしていられぬという必要が、日一日と迫ってきた。

そこで前記の成立学舎はいに入ることにした。

この成立学舎と云うのは、駿河台するがだいの今の曾我祐準さん
の隣にあったもので、校舎というのは、それはずいぶん
不潔な、殺風景きわ極まるものであった。窓には戸がないか
ら、冬の日などは寒い風がヒユウくと吹き曝さらし、教場
へは下駄を履はいたまゝ上がるといふふうで、教師などは
たいてい大学生が学資を得るために、内職として勤めて
いるのが多かった。

でも、当時この塾舎の学生としていた者で、目今有要な地位を得ている者が少くない。ちよつと例を挙げて言ってみると、前の長崎高等商業学校長をしていた隈本有尚、故人の日高真実、実業家の植村俊平、それから新渡戸博士諸氏などで、このほかにもまだあるだろう。隈本氏はそのころ、教師と生徒との中間くらいのところになっていたように思う。また新渡戸博士は、すでに札幌農学校を済すまして、大学選科に通いながら、そのあいだに来ていたように覚えている。なんでも私と新渡戸氏とは隣合った席にいたもので、そのころから私は同氏を知っていたが、

先方では気が付かなかつたものとみえ、ついこのごろのことである。同氏に会つた折おり、

「僕は今日初めて君に会つたのだ」と初対面の挨拶あいさつを交わされたから、私は笑つて、

「いや、私は貴君あなたをば昔成立塾にいたころからよく知つています」と云うと、

「あゝそんなことであつたかね」と先方むこうでも笑い出されたようなことである。

三

英語については、そのまえ私の兄がやっていたので、それについて少しばかり習ったこともあるが、どうも六か敷しくて解わからないから、しばらく廃よしてしまった。その後少しも英語というものは学ばずにいた者が、とにかく成立学舎へ入はいると、まえいうとおりたいていの者は原書のみを使っているというふうだから、教わるといふものの、もとく素養のない頭にはなかく容易に解らない。

したがって非常に骨ほねを折おったものであるが、規則立っての勉強も、特殊な記憶法も執とったわけではない。

また、英語はこういうふうによつたらよかろうという自覚もなし、たゞはやく、一日も早くどんな書物を見ても、それになにが書いてあるかということを知りたくて堪たまらなかった。それでいわばやたらに読んで見たほうであるが、それとてやはり一定の時期が来なければ、いくらなんと思つても解らぬものは解る道理がない。また、今のように比較的書物が完備していたわけではないから、多く読むといつても、自然と書物が限られている。まず

自分で苦勞して、読み得^うるだけの力を養うほかないと思
つて、なんでもやたらに読んだようであるが、その読ん
だものもおもにどういものか、今判然と覚えていない。
そうこうしているうちに予科三年くらいからだんく解
るようになってきたのである。

私はまた数学についても非常に苦しめられたもので、
数学の時間にはボードの前に引き出されて、そのまま
一時間くらい立往生したようなことがよくあった。

これは、大学予備門の入学試験に応じた時のことであ
るが、たしか数学だけは隣の人に見せてもらったのか、

それともこつそり見たのか、まアそんなことをして試験はやつと済すましたが、可笑おかしいのはこの時のことで、私は無事に入學を許されたにもかゝらず、その見せてくれたほうの男は、可哀想かわいそうにも不首尾に終つてしまった。

四

成立學舎では、およそ一年ほども通つたが、その翌年大學予備門の入學試験を受けてみると、まえいうたようにうまく及第した。ちようどそれが十七歳ごろであつた

と思う。

ちよつとここで、このごろの予備門について話してお
くが、はじめ予備門のほうの年数が四カ年、大学のほう
が四カ年、都合大学を出るまでには八年間を要すること
になっていたが、私の入学する前後はその規定は変じて、
大学三年、予備門五年ということになった。つまり総体
の年数からいえばまえといささか変りはないが、予備門
だけでいうと、一年年数が殖ふえたことになり、その予備
門五年をもまた二つに分わかち、予科三年、本科二年という
順序でした。

それで、予科三年修了者と、そのころの中学卒業生とを比べてみると、実際は予科のほうが同じ普通学でもはるかに進んでいたように思われた。すなわち予科のほうでは動物、植物、その他のものでもたいい原書でやっていたくらいであるが、その時の予科修了者は、中学卒業生と同程度ということに見^み做^なされることになった。だから中学卒業生は、英語専修科というに一年入^{はい}ると、すぐ予備門本科に入学することができたのである。規則改正の結果、つまりこういうことになったので、予科を経てゆく者より、中学を卒業して入った者のほうが二年だ

け利益とくをすることになる。

私などは中学を途中で廃よして、二松学舎、成立学舎などに通い、それから予科に入ったのであるから、非常に迂まわりみち路をしたことになる。そんな事ではむしろそのまま、中学を卒おえて予備門へ入はいったほうが、年数のうえからいっても利益であったが、私ばかりではない、私と同じような径路をもつて進んだ人がたくさんあった。その人達たちはまず損したほうの組である。

で、私はこの予備門にいるころもほとんど勉強はしなかつた。この当時は家から通わずに、神田猿楽町かんだざるがくちようのあ

る下宿屋に、今の南満鉄道の副総裁をしている、中村なかむら是公ぜこうという男といっしょに下宿していたものであるが、朝は学校の始業時間が定きままっているので、仕方しかたなく一定の時間には起床したが、夜睡眠の時間などは千差万別で、ほとんど一定しなかった。

やはり、このごろも学科について格別得意というものはなかった。なかにも数学、英語ときては最も苦しめられたほうであるが、といつて勉強もせず毎日毎日自由な方針で遊び暮していた。したがって学校の成績は次第に悪くなるばかりで、予科入学当時は、今の芳賀はが矢一やいち氏

などと同じくらいのところ、かなりいっしょにいたものであるが、私のほうは不勉強のため、下へ下へと下つてゆくばかり。そのほか、当時の同級生には今の美術学校長正木直彦、専門学務局長の福原鏝二郎、外国語学校の水野繁太郎氏などがあって、それ等らの人はなか／＼できるほうあったが、私達遊たちび仲間の連中はすべて不成績で、漸次、これ等らの諸氏と席のほうが遠ざかるばかりであった。

五

不勉強ぐらいであったから、どちらかといえは運動は比較的好きのほうであったが、その運動も身体からだが虚弱であつたため、規則正しい運動をつとめてやつたというのではない。ただ遊んだといふほうにすぎないが、端艇競漕ボートレースなどはまず好んで行やつたほうであろう。まえの中村是公氏などは、なか／＼運動は上手じょうずのほうで、いつもボートではチャンピオンになつていたくらいであるが、私は好

きでやったといっても、チャンピオンなどにはどうしてもなれなかった。

その他運動といっても、当時はまだベースボールもなく、テニス庭球もなかったから、普通体操くらいのもので、兵式体操はやらなかった。要するに運動というより気まぐらかってに遊び暮したというほうで、よく春の休みなどになると、机をすっかり取片付けてしまつて、とりかたづ足押、あしおし腕押、うでおしなどというつまらぬ運動——遊びをしては騒いでいたものである。試験になつてもそう心配はしない。「我あに試験の点数などに関せんや」といったような考で、まつた

く勉強という勉強はせず^にいたから、頭脳は発達せず、成績はますます悪くなるばかり。いったい私は頭の悪いほうで——今でもそうだが——それに不勉強のほうであったから、学校での信用も次第となくなり、ついに予科二年の時落第という運命に立ち至った。

落第してみると誰も同じこと、さすがに可^い気持はせぬ。それから前と違って、真面目^{まじめ}に勉強もするようになったが、やはり人普通のことをやったまでで、特別に厳^{きび}しい勉強を続けたというのではない。

教場へ出ていても前と異って、たゞ非常に注意して教

師のいわれるのを聞くようにしたというくらいのものであった。真面目に勉強し、学校に出ても真面目に教師のいうことを注意して聞くようにすれば、そうやたらに苦しまなくとも、普通ならやってゆかれることと思う。だから、私はよし真面目な勉強をするようになった後あとでも、試験の前々まえまえから決して苦しむようなことはせず、試験のその前夜になって、はじめて験しらべておくというような方法とを採とっていたくらいである。

六

ちようど予科の三年、十九歳ごろのことであったが、私の家はもとより豊かなほうではなかった。一つには家から学資を仰がずに遣やつてみようという考えから、月五円の月給で中村是公氏とともに私塾しじゆくの教師をしながら予科のほうへ通っていたことがある。

これが私の教師となったはじめで、その私塾は江東こうとう義塾ぎじゆくといって本所ほんじよにあった。ある有志の人達たちが協同して

設けたものであるが、校舎はやはり今考えてみてもずいぶん不潔なほうの部類であつた。

一カ月五円というと誠に少額ではあるが、そのころはそれで不足なくやってゆけた。塾じゆくの寄宿舎はいに入つてい
たから、舎費すなわち食糧費としては月二円で済すみ、予
備門の授業料といえは月わずかに二十五銭（もつとも一
学期分宛前納ずつすることにはなつていたが）それに書物は
たいいてい学校で貸し与えたから、格別そのほうには金も
要かゝらなかつた。まずこのうちから湯銭の少しも引き去れ
ば、後の残あと分のこりぶんはたいいてい小遣こづかいになつたので、五円の

金を貰もらうと、すぐその残分だけを中村是公氏の分と合せあわておいて、いっしょに出歩いては、多く食うほうへ費してしまったものである。

時間も、江東義塾の方は午後二時間だけであつたから、予備門から帰つて来て教えることになつていた。だから、夜などはむろん落ち付ついて、自由に自分の勉強をすることもできたので、なんの苦痛も感ぜず、約一年ばかりもこうしてやっていたが、この土地は非常に湿気が多いため、つい急性のトラホームを患わづらつた。それがため、今も私の眼は丈夫じょうぶではない。親はそのトラホームを非常に

心配して、「とにかく、そんな所ならむりに勤めている必要もなかろう」というので、塾のほうは退き、予備門へは家から通うことかよにしたが、まもなくその江東義塾は解散になってしまったのである。

それから、あとの学資はいうまでもなく、再び家から仰いでいたが、大学へ進むようになってからは、特に文部省から貸費を受けることとなり、一方ではまた東京専門学校の講師を勤めつつ、それほど、苦しみもなく大学を卒おえたような次第で、要するになんの益するところもなく、私は学生時代を回顧して、むしろ読者諸君のため

にいましめ戒とならんことを望むものである。

(明治四二・一・一「中学世界」)

日本文学電子図書館

私の経過した学生時代

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第1巻」角川書店
昭和42年10月10日 8版発行

日本文学電子図書館